

## ダブリン文学賞

### ノミネートする図書館へのアドバイス

ダブリン国際文学賞の候補作をノミネートすることは、世界中の図書館員や読者を集め、英語の小説 1 冊に対して世界で最も高額な賞の受賞者を決定するプロセスに参加することです。また、ダブリン文学賞は、受賞作品が翻訳作品である場合、賞の一部を翻訳者に割り当てる唯一の英語文学賞でもあります。受賞者を決めるのはあなたですが、ノミネートされた作品の中から最終的に受賞者を決めるのは、審査委員会です。審査員は何を求めているのか？ノミネートを検討する際には、いくつかの点に留意する必要があります。

#### ページ上の言葉

小説でどんな読者も最初に心を打たれるのは、文章のクオリティです。これはいろいろな意味があると思いますが、優れた小説には、場違いな言葉が一語もないという感覚が存在します。これは、必ずしもその文章が詩的な性質を持っているという意味ではありませんが、以下のようなことを意味しているのかもしれませんが。2015 年の審査員は、その年の受賞作であるジム・クレイスの『ハーベスト』を評して、「長い散文詩のように読め、言葉の川のように耳を楽しませてくれる」と述べています。同様に、エドワード・P・ジョーンズの『ザ・タウン・ワールド』（2005 年度受賞）には、「強烈な抒情詩のような節」がありました。しかし、それは逆の意味にもなり得ます。ターハル・ベン・ジェルーンの『あやまちの夜』（2004 年度受賞）は、「切実なまでにシンプルであり、最も簡潔な言葉で語られて」おり、ヘルブラント・バッカーの『双子』（2010 年度受賞）は「控えめに書かれて」います。一方、ヘルタ・ミュラーの『心獣』（1998 年度受賞）は「質素な雄弁さ」で書かれている、と審査員から評されました。どのような書き方であれ、ダブリン文学賞にノミネートされた小説は、独特のスタイルを確立し、単なる実用的な散文以上のスタイルを有している必要があります。読者が立ち止まり、自分自身にこう言い聞かせる瞬間が必ずあるべきです：「今のは記憶に残る文章だ。」

#### ジャンルについて一言

世界中の図書館で、何百万人もものあらゆる読者がジャンルフィクションを楽しんでいます。犯罪、ロマンス、ホラー、サイエンスフィクションはすべて、それが深い恐怖心であれ、控えめなすすり泣きであれ、読者が期待しているものを正確に読者に届けてくれます。しかし、ジャンルフィクションは文学賞のどこに位置するのでしょうか？「文学作品には、ジャンルのルールに則ったものと、それを破るも

のがあり、ルールを破る小説とは、小説の形式によって新しいこと、予想外のことが起こすものだ」と言った人がいました。文学賞が求めているのは、そういうことなのです。例えば、ファン・ガブリエル・バスケスの『物が落ちる音』（2014 年度受賞）のような小説は、語り手が無作為の暴力行為によって犯罪の裏社会に引き込まれるという犯罪小説の形式をとっていますが、その後の展開は、最も優れた犯罪小説をはるかに超えるものになっています。ケヴィン・バリーの『シティ・オブ・ボーン』（2013 年度受賞）は、一種のシュールリアリズム西部劇のようですが、ゼイン・グレイの作品と間違える人はいないでしょう。読者にストンと落ちるような良い読後感を与える小説であれば、それを素晴らしいものだと言われるべきです。ジャンルフィクションの本当に優れた作品は、エドガー賞、ヒューゴー賞、シルバー・ダガー賞を受賞し続けるでしょうが、ダブリン文学賞を受賞する可能性は低いでしょう。ジャンルフィクションの簡単な経験則は、「それがジャンルフィクションかどうかを尋ねなければならぬ場合、おそらくそうではない」ということです。

### ローカルとインターナショナル

ノミネートプロセスは、ダブリン文学賞が真に国際的であることを示すものの一つです。世界中の多くの図書館が審査員の目となり耳となり、世界のどの地域から新しい文学の声が生まれるかわからないというスリルを味わうことができるのです。長年にわたり、図書館はノミネートすることにより地元の作家を宣伝することに成功しています。しかし、ここで覚えておくべき点があります。読者にその地域のコミュニティを新鮮な方法で見せる小説がいくつかあります。しかしそのせいで、その地域の読者は、深く描写されていない歴史的詳細や、方言の多さ、お決まりのプロットや乱雑な文章を大目に見ることがあるのです。しかし、このような小説は、広い範囲では受け入れられません。特定の地域に深く根ざした小説が、国際的な読者に同様の影響を与えるためには、その独特の文章のクオリティと、小説に何ができるのかという驚きの感覚を備えた、それ自体が素晴らしい小説でなければなりません。長年にわたり、作家の地元の世界に深く根ざしながら、広く読者に語りかけるような受賞作が数多くあります。アリスティア・マクラウドの『彼方なる歌に耳を澄ませよ』（2001 年度受賞）は、ある意味、地域小説の典型ですが、その文章の美しさゆえに、ノバスコシア州ケープ・ブレトンを世界中の数多くの読者の想像上の地理の一部にすることができたのです。ノルウェーの田舎町を描いたパール・ペッテルソンの『馬を盗みに』（2007 年度受賞）や、オランダのプラッテウラントを描いたヘルブラント・バッカーの『双子』（2010 年度受賞）にも同じことが言えます。また、非常に特殊なローカルな世界に埋もれた小説が、地球の裏側の図書館からノミネートされることもあり、その本の魅力が地域を越えて届くのかどうか、本当の意味で試されることもありません。たとえば、エミリー・ラスコヴィッチの『アイダホ』（2019 年度受賞）は、そのタイトルが示すように、著者が育ったアイダホ州パンハンドルを豊かに思い起こさせるもので、ベルギーの図書館からノミネートされました。

## 翻訳と国際性

ダブリン文学賞は、英語の小説を対象とした主要な賞の中で唯一、受賞作が翻訳である場合、著者と翻訳者で賞を分け合う賞です。小説の翻訳には時間がかかるため、審査プロセスを組織することは簡単ではありません。しかし、私たちはその価値があると考えています。この賞が真に国際的なものであるためには、英語圏を超えた声に開かれている必要があります。翻訳は英語圏の読者にその声を届ける方法であるため、私たちは世界各国の小説を歓迎しています。特に、多言語読者がいる地域の図書館には、そのプロセスを開放しています。文化が交差することで、エキサイティングなことが起こるからです。そうは言っても、審査員は翻訳で書かれた小説を優先するわけではなく、原作の内容を忠実に表現していない翻訳を許容するわけでもありません。「スペイン語/ハンガリー語/ウルドゥー語などの方が良かった」というコメントは、審査において許されないコメントです。翻訳された小説は私たちにとってそれ自体が英語の文学作品と考えているので、翻訳者に賞を贈ることにしています。

## そして受賞作品は (再び...)

簡単に賞が集まってくるように思われる小説もあります。ある小説があまりに素晴らしいので、異なる審査員が個別に同じ結論を出したということもあります。しかし、時には賞が賞を生むような感覚もあります。ダブリン文学賞の審査員は、ノミネートされた小説やその著者が過去に賞を受賞しているかどうかを一切考慮しません。これは私たちにとって特に重要なことです。ダブリン文学賞は翻訳作品を対象としているため、他の多くの文学賞よりも長い時間軸で選考が行われます。そのため、ダブリン文学賞の選考が始まる頃には、先に受賞した他の賞の後塵を拝することもあります。初作を書いた小説家とノーベル賞受賞者が同じ確率で受賞できるということを私たちは誇りに思っています。実際に、エミリー・ラスコヴィッチの『アイダホ』(2019年度受賞)とラウィ・ハージの『デニーロ・ゲーム』(2008年度受賞)はともに初小説で、2023年度受賞者のカーチャ・オスカンプはわずか2作目の『マルツァーン・モナムール』で受賞しています。また、レビューに関する議論も排除しています。審査員は何らかの形で文学に携わっている人たちなので、ノミネートされた小説の批評を目にすることもありますが、それらは審査には関係ありません。また、以下のようなコメントは許容されません：Xは『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』に「これは傑作だ」と書いていた。それに対する反応：「Xさんにとっては素晴らしいですね。しかし、彼女/彼はこの審査委員会のメンバーではありません。」

## 驚嘆

これらすべて考慮の根底には、ダブリン文学賞が文学賞であるという認識があります。審査員が求めているものがあるとすれば、それは小説が、私たち誰もが認識していながら、ほとんど定義することができない不思議な感覚を生み出す瞬間です。もし定義できるものなら、それを瓶詰めして販売

することでしょう。時には、今まで見たことのないようなことをしている小説を読むことから始まることもあります。たとえば、マイク・マコーマックの『ソーラー・ボーンズ』（2018 年度受賞）は、文節の区切りがないのに、深い人間味と非常に読みやすい小説を生み出すことに成功しています。ジョゼ・エドゥアルド・アグアルーザの『忘却についての一般論』（2017 年度受賞）は、物語と詩の断片やテキストの断片を組み合わせて、他に類を見ない小説を織り上げています。また、まるで新しい人間が作り出されたかのような説得力のある語り口で、その不思議さを表現することもあります。コルム・トビーン『巨匠 ヘンリー・ジェームズの人と作品』（2006 年度受賞）は、ヘンリー・ジェームズが書いたヘンリー・ジェームズについての小説のように読めますし、アンナ・バーンズの『ミルクマン』（2020 年度受賞）は、はまたく独創的な声で語られています。オルハン・パムクの『わたしの名は赤』（2003 年度受賞）では、読者は 16 世紀のイスタンブールという全く異質な世界に住む細密画家の心の中に入り込むことになります。ケヴィン・バリーの『シティ・オブ・ボハーン』（2013 年度受賞）には、「世界創造」とでもいうべき不思議さがあり、ホームレス中毒者のグループを舞台にしたジョン・マクレガーの『イーブン・ザ・ドッグス』（2012 年度受賞）には、まったく別の意味で、審査員からこんな感想が寄せられました：「小説が新しい技術や慣用句をどのように取り入れているかという鮮やかな感覚で読者を満たします。」結局のところ、ダブリン文学賞の楽しみのひとつは、何にでも応用できる魔法の公式がないことなのです。それにもかかわらず、28 年間にわたって毎年私たちは、文学形式としての小説が新しいことを行うことができ、あるいは私たちが想像したこともなかった方法で古いことを行うことができるということを再び確認し続けています。2004 年度の審査委員会は、その年の受賞作であるターハル・ベン・ジェルーンの『あやまちの夜』を評して、次のように書いています：「本で実現させるのは稀ですが、文学の真の目的を実現しています。」

クリス・モラシユ教授、トリニティ・カレッジ(ダブリン大学)教員、ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー会員  
審査委員長  
ダブリン文学賞